

視点

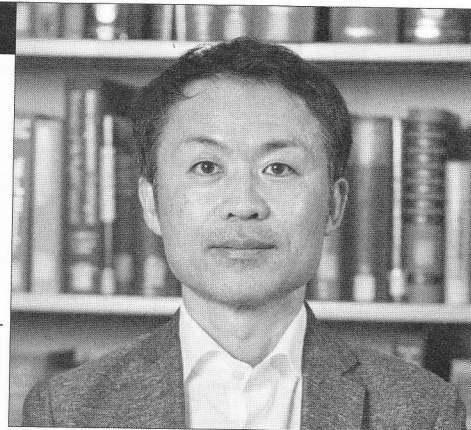
日本語で議論できなければ、英語で議論できない

●インタビュー

阿部公彦

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授

あべまさひこ ●東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授。専門は英米文学。1966年生まれ。東京大学文学部卒業。同修士を経て、ケンブリッジ大学でPhD取得。2001年より現職。著書に『文学を〈凝視〉する』（サントリー学芸賞）、『史上最悪の英語政策』など。



2020年度から実施される「大学入学共通テスト」では、英語で民間のスピーキングテストが導入される。これについては、高校現場からも戸惑いや疑問の声が聞こえてくるが、この改革はどが問題なのか？ 英文学者で東大文学部教授の阿部公彦先生にご意見をうかがった。また、阿部教授には、高校のうちに身につけてもらいたい英語能力についても聞きした。

分断されるスピーキング

——民間スピーキングテストの一番の問題は何でしょうか？

阿部 推進派の人たちは話を単純化するために「日本人は英語がしゃべれない」という点ばかり強調してスピーキングテスト導入を後押ししていますが、そうやって「スピーキング」だけを分離して考える習癖が、まさに「日本人が英語ができない」原因だと私は思っています。

このところ「スキル」という言葉が流行して、英語運用の側面だけを分離する見方が強

まっています。本来学校でどのような「知」を身につけるべきなのか、という総合的な視点が抜け落ちていきます。だから、学習も表層的で見かけ倒しになりがち。なぜ義務教育で英語を教えるのか、考え直すべきです。民間試験など導入したら、この傾向はますます強まるでしょう。学校での教育になじまない試験対策ばかりが目が行き、対策用の塾が主導権をとって学校教育は空洞化します。むしろ「英語力」は向上しない。今より落ちるでしょう。

「日本人は英語ができない」と百年以上言われ続けてきたが、理由は簡単で、英語と接する時間が少なく、英語を使わなくても用が足りるからです。そんな中で、スピーキング試験対策中心の英語教育だけが蔓延したら、人工的な「二重英語」の押しつけになるだけ。これでは、将来、本当に英語が必要になる人にとっても非常にダメージが大きくなります。

——ダメージというのは？

阿部 今の日本の現状では、大

学生、あるいは社会人になって努力して英語の最終段階を身につけるといいうのが自然です。ところが、「高校卒業までに4技能均等に！」などという見当違いの目標をかけたなら、本来の基礎的な学習がおろそかになり、高校卒業後の「伸びしろ」まで期待できなくなります。

——推進派は「四技能」を盛んに強調しますが？

阿部 4技能均等などと称して「技能」をばらばらに学習させようとするのは時代遅れです。読み、書き、話し、聞くことの連携こそが必要なのです。学習の過程で発声練習や会話などのやり取りを取り入れるのはけっこうだし、もっとやるべきでしょうが、そこでは技能のオーバラップが強調されるべきです。

——実際のところ、高校まででスピーキングを鍛えるのは簡単ではないと思いますが？

阿部 やりたい人、余裕がある人はやればいい。それを一律に課すというのがおかしいのです。しゃべることに関しては、こ

れまで日本語でさえテストして

いません。人前だとうまくしゃ

です。

——そもそも入試でスピーキング

民間試験は選抜のために作ら

間業者のスピーキングテストが

言葉が流行して、英語運用の一面面だけを分離する見方が強

阿部 — ダメジというのは？
阿部 今の日本の現状では、大

課すというのがおかしいのです。
しゃべることに関しては、こ

れまで日本語でさえテストしていません。人前だとうまくしゃべれない人や、機械の前だとしゃべれないという人はいくらでもいる。

GTECの試験はタブレットに向かってしゃべります。みんなそれ専用の練習が必要になるでしょう。それで人間相手のやり取りができるようになるのか、コミュニケーションというのはもっと複雑でデリケートなもの。形だけテストすればできるようになるものではない。

実際のコミュニケーションでは相手の言葉を聞くのが7、8割です。文法の理解がなければ、相手の言葉もわからないし、相槌を打ったり、反対意見を述べたりすることもできない。また読解で鍛えるべき「文脈の理解」なども、当然、会話では大事です。しゃべるといえるのは、受信・発信などという単純なものではなく、情報の摺り合わせや誤解の解消、情緒のぶつけ合いなどからなるものです。人が面と向かってしゃべるときには何が起きているのか、もっと考えてほしい

です。

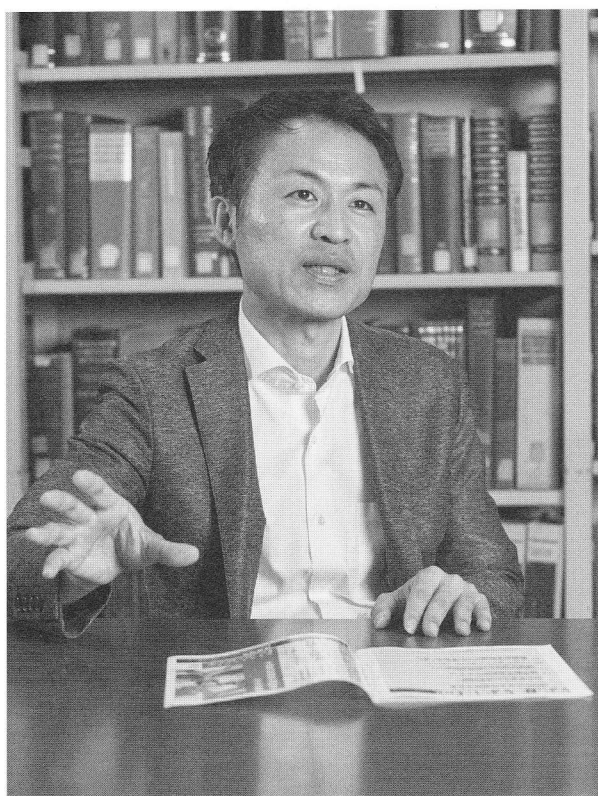
——そもそも入試でスピーキングテストをやるべきなのか、という議論になりますね。

阿部 今の段階では無理。それよりも、まず日本語を話すテストからはじめるべきです。その延長に英語があると思います。

実は今回、推進派が参照したと言っているCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）でも、重視されているのは「複数の言語が混じった状況」です。

ところが、民間試験導入の背後にあるのはきわめて能天気な「英語が流暢にしゃべれる日本人を！」という発想で、どうも周回遅れぐらいに感じます。むしろ、英語にも日本語にも通底する根本的な「言語力」を鍛えたい。

まずは母語から。日本語で議論できない人が英語で議論できるわけがない。学校でレトリックや議論の時間を設け、「言葉ってこんなふうに使えんだ」と思わせる。その延長でたまに英語にスイッチする、ということでもいいでしょう。



——民間試験は選抜のために作られていないので、大学入試センターなどがスピーキングテストを作ればいいという高校の先生方の意見もあります。

阿部 センター試験は評価が高い。ところが、「センターはスピーキングの実技がない」という一点だけでこれを廃止しようという、おかしい議論です。センター試験のさまざまな長所を投げ捨てて導入されるという民

間業者のスピーキングテストがどれだけの効果を持つというのでしょうか。まったく正当性の感じられない改変です。

これらはもともと自己診断のためのテストだから、テスト問題も開示せず、同じ問題が何度もしサイクルされます。そういうテストは情報を集めた塾で対策をすれば、点数をあげやすい。対策塾のいうとおりであれば、英語力があがってなくて

も、点数はあげられるということとです。

それから、試験を作る業者は、試験対策業者でもあるのです。まさに利益相反。業者は営利目的なので、試験の受験者数も、対策塾の受講者数も増やしたいでしょう。漏洩すれすれのこと起きてもおかしくない。すでにダンピング（甘めに点数を出すこと）は始まっています。

——一律にスピーキングテストを課せたら、さまざまな分野の優秀な学生が落とされてしまう恐れもありますね？

阿部 民間試験を足切りに使うとの案もありますが、余計に悪いです。理系の天才が英語のスピーキングで落とされるのはおかしいでしょう。

基礎があるから 発展がある

——高校で身につけるべき英語の基礎力とは何でしょうか？

阿部 大事なのは、リズムや音に慣れることです。日本人がもつとも苦勞するのは音です。日本語と英語の音やリズムの構

造は違うのです。

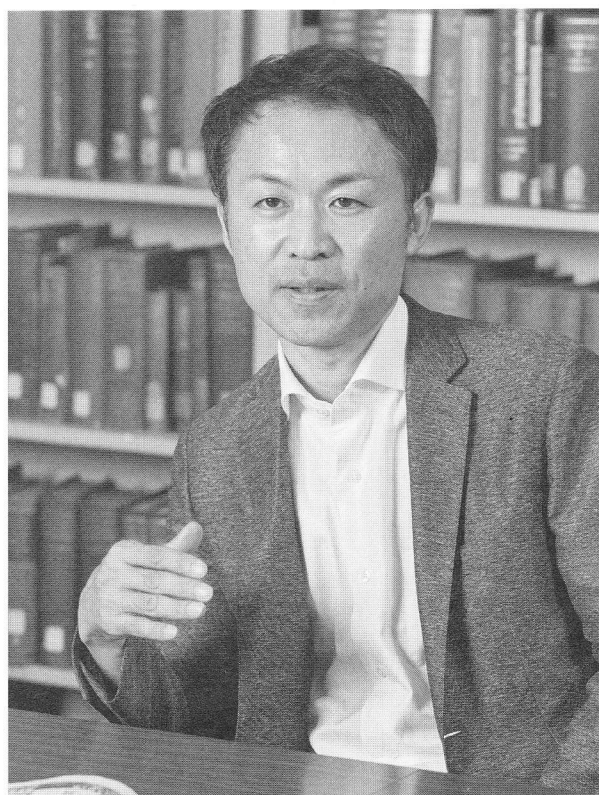
そういう意味では、上達のためには、英語のなかに放り込むのが一番。英語圏に一定期間住めば誰だってある程度英語ができるようになります。だけど、そのような機会はなかなかないし、必要もない。犠牲が大きすぎる。

そこで多くの日本の学校は、別のルートでやってきました。生徒の知的好奇心を刺激して英語に興味を持たせ、自発的に勉強させるという方法です。そうした方法でかなりの数の「英語ができる人」が育ちましたし、興味を持ち方はまだまだ開拓できます。

語学学習は何よりモチベーションです。テスト対策では長続きしませんし、役に立たないテストオタクが育つだけです。

——「スピーキングは、文法が多少間違っても通じればいい」という意見もありますか？

阿部 「どんなんしゃべろう」という心構えは悪くないです。ただ、「文法はどうでもいい」というのはおかしい。



基礎力の話に戻ると、英語の音を聞くのがまず大事なんですけど、効率的にやるなら文法が必要になります。英語の基礎文法なんて薄い本を1冊読めばカバーできる。ただ英語が難しいのは、文法が少ない分、慣用句など覚えなければならぬものが多いことです。外来語も多いので、単語を身につけるのも一苦勞。

実際の運用の場面で問題にな

るのは、どれくらいその状況に応じた単語や慣用句を身につけているかです。でも、学校ではあらゆる「状況」をカバーすることはできないので、まずは基礎を教え、あとは各自よろしくとなる。

例えば、トヨタの社員になって、アフリカで車を売ろうというとき、学校英語では絶対に足りないでしょう。車の部品の説明やアフリカの気候の説明まで、

全部できないといけないからです。

ていることを取り違えたら、たいへんなことになるでしょう。

音声疎かだと、読解や作文でも損をします。たしかに40年ほ

く、リズムの山を聞くという訓練が必要です。日本語は高低の

もつとも苦勞するのは音です。日本語と英語の音やリズムの構

ただ、「文法はどうでもいい」というのはおかしい。

苦勞。

実際の運用の場面で問題にな

りないでしょう。車の部品の説明やアフリカの気候の説明まで、

全部できないといけないからです。

でも、「だから学校英語は使えない」と言うのは短絡的でしょう。あらゆる状況に対応できるわけがないんです。ですから、学校では、芯になる文法を学び、残りは自分で勉強するという道筋を示して指導するのが大切になります。基礎ができていれば、その後の発展は大いに見こめます。でも、基礎が欠如していると、単語や熟語を覚えるのにも、2倍、3倍の時間がかかってしまい、かえって非合理的になります。

——「読解は大まかに意味がわかればいい」という意見については？

阿部 これも間違いです。例えば、相手があることを言うとき、否定したいのか肯定したいのかを見極めるのは非常に大事です。それがわかるためには、仮定法などを勉強しなければいけない。仮定法を使うときは、しばしば現実とは反対のことを言い、あとで否定したりするからです。ビジネスの商談で、その人が否定するために言うことと肯定し

ていることを取り違えたら、たいへんなことになるでしょう。

大まかな意味でいいと言っている人は、名詞を拾わせているだけです。名詞だけでは議論の方向はわかりません。雑誌の記事を流し読みするならそれでいいかもしれないけど、大事な局面で我々が読み解かないといけないのは、相手の意図や心情の部分です。これはきちんとした文法の上でしか把握できない部分です。

音に対するリズム感が大事

——今、読むことより話せたほうがいいとなつていますが、大学の先生方は、読めないと大学では使えないと言います。

阿部 大学は知の現場ですからリテラシーがなければ話になりません。だから、タブレットに向かった発声練習に膨大なエネルギーを使って、一切読めないという人が来ても大学では困るのです。

ただ、四技能派の人たちにも多少の理はある。読解偏重で、

音声がかたどと、読解や作文でも損をします。たしかに40年ほど前までは、そのような偏った傾向があった。だから、もっと音声を、という話になった。しかし今は音声のほうに行き過ぎて読めない学生が多いです。

ですから、音声に対する反応・理解と読解・文法を組み合わせた学習をすべきだ、と私は言いたい。読むときも書くときも音とからめて訓練したほうが助けにはなる。そういう意味では、私はそれほど四技能派の人たちと考えが違います。ただ、今その議論が行き過ぎて、「読解はいらない」「文法はいらない」となっている。一部の思惑のある人たちが「4技能看板」を悪用して、間違った議論をしているのです。

——高校生にはどのような英語力を身につけてほしいですか？

阿部 語彙力、基本的な文法能力、そして音に対するリズム感です。この3つは絶対的に必要です。

特にリズム。聞き取りのコツとしては、英語の音全部ではな

く、リズムの山を聞くという訓練が必要です。日本語は高低のアクセントで音を言い分けますが、英語はストレスアクセント。英語では、山の部分を拾うことで自然と谷の部分がわかるというシステムなのです。

ところが、高低になれた日本人はどうしても全部を聞こうとする。そうすると、音の情報が多すぎるように感じ「速すぎてぜんぶ聞けなかった」となる。脳のキャパを超えるのでしょう。でも、これは速いのではなくて、ポイントを捕まえていないだけです。

例えば、速いと感じられる熱烈な議論を聞きながら、どこを強く言っているかを意識すると、自然とリズム感が身につきます。

高校生相手ならスバルタ式でどんな英語を聞かせることと、英語と日本語でどこが違うかを考えさせるのもいい。この両面作戦。最近流行りの言い方で言うところ、「気づき」を作ってあげるといことです。

(取材・構成／沢辺有司)